

# ひきこもりの問題点と必要としている支援



NPO法人青少年自立援助センター  
常務理事 河野久忠

# 不登校とひきこもり

---

現場的な感覚では、ひきこもり状況に陥っている60%程度の対象者が不登校経験がある  
対人面での何らかの課題があると推測される

初期の不登校は、ひきこもりタイプが多かった  
当法人の支援はここから始まっている

不登校は、長期のひきこもりにつながるサイン・きっかけであり、逆に言うと支援開始の  
チャンスでもある

# 行政等のひきこもり支援の現状

医療・福祉的支援

(ひきこもり支援センター  
事業等)

(厚生施策)

この間の施策が少ない。

基本的に民間の支援になる。

正しい見立てをしていかない  
とミスマッチが発生する

職業訓練・ハ  
ローワーク・  
サポステ等

(労働施策)

# 多摩市における相談会の状況

ひきこもり等に関する相談会(市役所内で実施)

対象者→市内在住のひきこもり等で自立に悩みを抱える若者(義務教育終了後15歳～39歳)及びその家族

(年齢・性別・ひきこもり期間)

目録 36歳:男性(13年間)      36歳:男性(18年間)      38歳:男性(15年間)

目録 25歳:男性(10年間)      30歳:男性(8年間)      35歳:女性(3年間)      36歳:男性(20年間)

# 6月30日ひきこもりに関する講演会(関戸公民館)

(アンケート結果抜粋)

## 1. 参加者属性

当事者の家族	24	68.6%
ひきこもり当事者がいる方	2	5.7%
当事者	1	2.9%
	1	2.9%
	4	11.4%
	3	8.6%
	0	0.0%

## 2. ひきこもり当事者の家族内訳

父	11	45.8%
母	10	41.7%
兄又は姉	2	8.3%
弟又は妹	0	0.0%
祖父	0	0.0%
祖母	0	0.0%
叔母・叔父	1	4.2%
不明	0	0.0%

## 3. 年齢

14歳以下	1
10代(15歳以上)	3
20代	8
30代	7
40歳以上	8
不明	3

## 4. 学校や仕事から離れてからの期間

	5	16.7%
	2	6.7%
	9	30.0%
	3	10.0%
	7	23.3%
	4	13.3%

## 5. 現在受けられている支援の状況

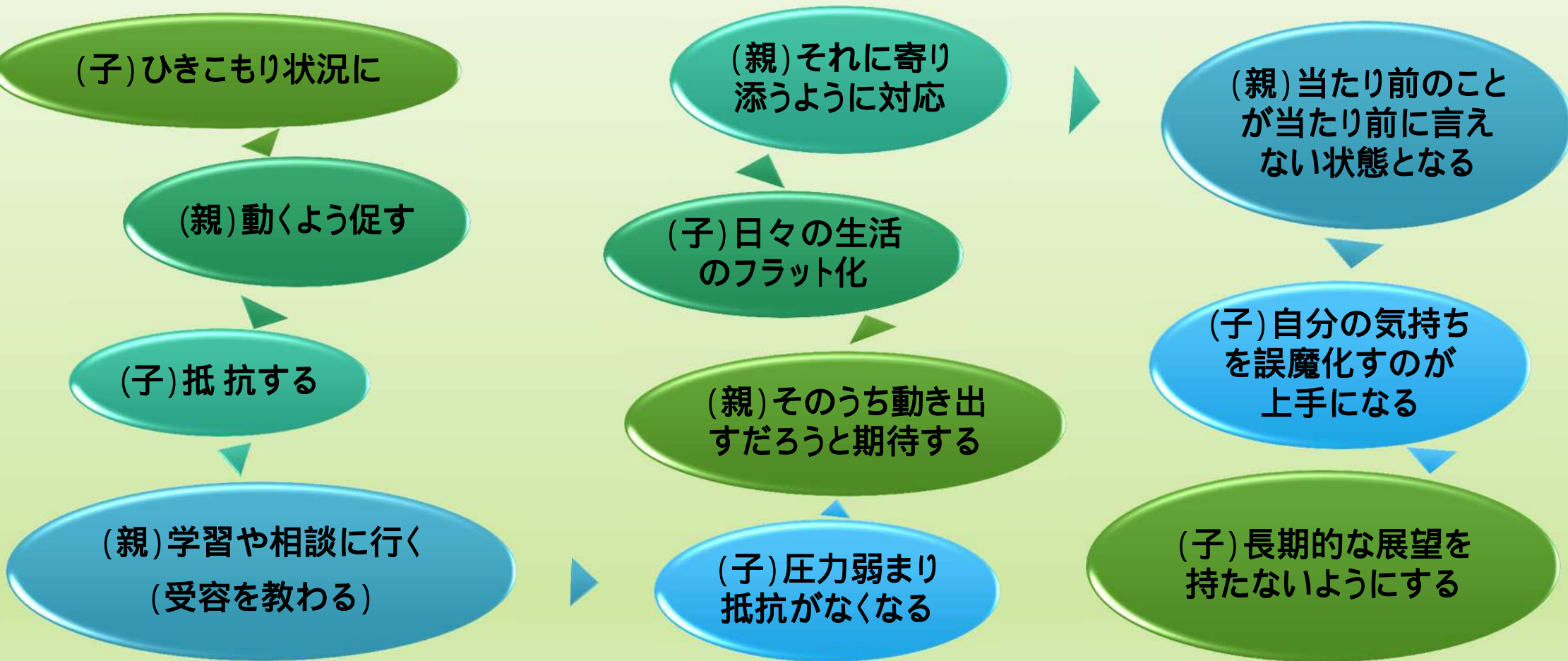
一度も支援を受けたことがない	18	60.0%
過去に支援を受けたことがあるが現在は受けていない	3	10.0%
時々支援を受けている	2	6.7%
定期的に支援を受けている	2	6.7%
その他	0	0.0%
不明	5	16.7%

## 6. 支援を受けている機関(複数回答)

地域若者サポートステーション	1
ハローワーク	0
病院	2
保健所	0
民間の相談機関	1
市区町村の相談窓口	0
多摩総合精神保健福祉センター	0
その他	0
不明	0

回収数35 / 参加者43名(回収率81%)

# ひきこもりの高年齢化・長期化のスパイラル



# ひきこもり状況の根本的な問題

ネット依存・ゲーム依存??

→根本的な課題は、構築されてしまっている親子の共依存関係

ひきこもり状況

→支える側(親・家族)があって初めて成り立つもの…

この関係性を理解した上での、施策立案が必要になる。





# 長期・高齢化がもたらす問題

---

- ・犯罪の問題
- ・自殺の問題
- ・精神疾患等の発症
- ・生活保護等の社会的コストの増大
- ・他の兄弟への経済的・精神的負担



# ひきこもり状況が招く自立への障壁 (待ち続けることのリスク)

・社会性の不足      自己肯定感の低下

## 現実的な課題

- 履歴書の空白
- あきらめ感の増大(年齢が若ければ若いほど周辺との差が気になる)
- 長期化により選択肢がせまくなる
- 2次的に精神の問題が出てくる
- こだわりの増加(発達障がい等の判別が難しくなる)

待ち続けること(孤立状態の長期化)が生きる力を低減させていく・・・

# どこにターゲットを絞っていくかが最初は重要

・学齢期であれば、不登校等含めて、保護者や教員、ソーシャルワーカー等にひきこもり状況に陥っていく家族の共依存関係の理解を進めていくことも重要と考える

→その上で、繋げていく機能を拡充していく必要がある

(切れ目のない支援で子どもも保護者もフォローしていく必要がある)

・年齢が高くなった際には、年齢だけを見るのではなく、若者特有の問題(思春期的感覚)も理解しながら、段階的な支援策を考えていく必要がある

→この際には、関係機関や地域を巻き込んだ支援策を考えていく必要がある

→医療・福祉から自立・就労までの幅を持った支援策が必要になってくる

# ひきこもり支援

層によって対策は異なってくる

した第一の対策としては、初期の見立てが重要となる。

護者や当事者に対する個別相談の機会

トリーチ(訪問支援)の実施

報提供は要になってくる。

中学生ならば、中3のタイミングが重要な転機となる

(当事者・家族とのつながりをいかに保ち、次に繋げる支援が必要)

・福祉との連携策

就労支援の場の設定

的な生活習慣も含めての段階的支援：社会性の獲得の場)

困窮者支援との連携・住み分けも重要と考える

今後必要と感じる支援(複数回答)

個別相談	17
訪問相談	15
就学支援	2
就労支援	11
家族会	2
家族向けセミナー	3
当事者の居場所	8
その他	0
不明	0

6月30日ひきこもりに関する講演会(アンケート結果抜)

# 就労自立支援

個々の段階に合わせた支援が必要



通所型就労支援

サポステ

職業訓練校

ハローワーク



宿泊型就労支援

医療・福祉

